



今月の御聖訓



信者 半月 如レ照ニスガ 闇夜ヲ
 如レ照ニスガ 闇夜ヲ
 信者 半月 如レ照ニスガ 闇夜ヲ
 如レ照ニスガ 闇夜ヲ

華嚴経等の一切経は闇夜の星のごとし。法華

経は闇夜の月のごとし。法華経を信（信せざる）れども深く不（信せざる）

信（信せざる）者は半月（闇夜を照らすが如し）、如レ照（闇夜を照らすが如し）ニスガ 闇夜（闇夜を照らすが如し）ヲ。深く信ずる者は満月の

如レ照（闇夜を照らすが如し）ニスガ 闇夜（闇夜を照らすが如し）ヲ。

【薬王品得意抄 全集一五〇一頁】

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
お講講話「時に適う信心とは」	菅野憲道 2
読書案内『ではまた明日』	松田銘道 8
続・日興上人御本尊調査記録〔八〕	山上弘道 9
天地つかの間〔その⑧〕	成田詳道 12
家を守る話〔その三〕	松井照雄 13
「弟子分帳」と十七回忌〔二十二〕	松田銘道 14
ちょっと寄り道⑧〈インターネット〉	森田観道 17
恵日だより	18
【年頭挨拶】	菅野憲道 19
二月の行事 如月詠草 訃報	

信仰と学問のはざま

菅野憲道



昭和の初期、大谷大学・真宗大谷派から金子大栄・曾我量深両学匠が追放されるという事件が起きた。これは両者の著書が伝統的な「指方立相」という西方浄土の実在説に対し、観念の浄土説を唱えたことが異安心として告発され、僧籍離脱にまで発展したのである。

この問題は、社会の近代化にともない当時の仏教教団が伝統的な教学の革新に迫られ、浄土真宗においても実証的な歴史学、論理学や現代哲学をもって西方極楽世界を解釈しようと試みたため、これを守旧派から異安心として指弾され追放されたのであった。

今であれば、誰も西方に極楽が実在するなど言いはしないが、当時は龍谷大学等でもこうした学問と伝統的な信仰の間で深刻な葛藤劇が十数年にわたって演じられたのである。

因みにわが宗門でも、堀日亨上人は明治期の露志問答での、師範日露上人や日布上人の窮状をまのあたりにして、宗史・宗学の革新を志されたのであるが、その苦心を知らない僧俗から相当な反感を買い、陰口をたたかれたものである。いな未だに「堀上人は学者だから」等と疎んぜられているのである。いまの宗門内外にも古い体制や伝統にしがみつき、古いものなら何でも墨守しようという権威主義者や、頑迷固陋な盲信者や原理主義者が多いのは驚きでもある。当時の学匠・福重照平師の次の言葉を見ると、今の宗門はむしろ精神的に退化しているのではないかとの錯覚すら抱く。

「……これは宗門とても同じだ。伝統や歴史に疵が付く、仕来たりの信仰——迷信を破壊するを恐れて宗祖の精神を等閑にするものは真に宗門を捨てて完全に之れを殺すものである。荒療治を恐れては末法に宗門の維持も弘通も出来るものではない。」（『信行学』二八三頁）

我が宗門では戒壇問題や本尊問題・血脈問題などをとっても教学の近代化は全く手つかずのままであり、混迷はますます深まるばかりである。正信覚醒の道はなお遠い。もう一度大聖人の信仰とは何か、学問とは何か、原点に返って研鑽し、法門を立て直す時期が来ているのである。普通の人に通ずる平明な言葉をもって大聖人の真精神を伝えていくことこそ急務である。志ある僧俗のいっそうの精進と支援を期したい。

お講講話(要旨)

拜読御書

「南条兵衛七郎殿御書」(全集一四九五頁)

時に適う信心とは

菅野 憲道

《正信への道筋——宗教の五綱》

今月は「南条兵衛七郎殿御書」を題材に宗教の五綱、中でも「時」を中心に述べてみたいと思います。

宗教の五綱とは、宗旨の三箇とともに大聖人の仏法の根幹をなすもので、仏法入門の基本でもあります。まず宗旨の三箇とは信の対象たる、仏法そのものであり、法華本門の本尊・戒壇・題目の三大秘法のことであり、我われが宗旨として信受すべき根本法そのものを宗旨といえます。

世間では、明治以降、英語のレリジョンを翻訳する際に「宗教」という言葉をつかったので、宗教と宗旨をこちゃ混ぜにして、「私の宗教は〇〇です」などといいますが、本来この場合は「私の宗旨」というのが正しいのであります。宗教とは宗旨を敷衍し証明する論理をいうのであり、教相判釈をいうのであります。日蓮大聖人は宗旨の三秘を立てられるに当たり、まずその前段として、伊豆法難の頃には五綱判(五義判)を立てられているのであります。

すなわち大聖人の宗旨は「教・機・時・国・教法流布の先後(序)」の五つの尺度を基本的な教義理論として、本尊や修行等が導き出されるのであります。

八万聖教といわれる多くの経々を総合的に把握して、なおかつその要法を選んで宗旨を定めるには、教義の浅深・勝劣、衆生の機根の上下・愚賢、時代的・歴史的状況、国土・社会の特質、仏法流伝の経緯等を知らなければなりません。

この五つの物差しによって末法の我われ衆生が、いかなる教法によって何なる本尊を立て、どんな修行によってどんな証果を得るかが定まるのであります。それ故にこの御書では、この五綱判をもって、なぜこの南無妙法蓮華経の仏法でなければならぬのかを、南条時光の父である兵衛七郎に説明なされているのです。

ところで、我われは仏教経典等を読んでもその意味すらよく分からないのですから、ましてや一代聖教の全体にわたって、その心を知ることなど及びもつかないことです。実際、他宗の開祖たちは、一代聖教を総合的に把握するための努力を放棄し、自分の気に入った経典や、手近な経典を抛り所にする宗旨を立てている



門松が飾られた源立寺山門

道門と浄土門のふるいにつけて、念仏のみこそ極悪の衆生の機にか
なつたものという、いかにも偏狭かつ安易な結論を導き出して宗
旨を立てているのであります。

しかし、天台大師と日蓮大聖人のみは血の滲むたじような研鑽と、
不惜身命の宗教体験によって仏教全体を通観し、総合的に把握し
た上で法華経の宗旨を立てられたのでありまして、この点におい
ても我われは大いなる確信を抱くのであります。

《末法という時——五濁の世》

「仏入滅の次の日より千年をば正法と申し……像法千年の後は
末法万年なり。持戒もなし破戒もなし、無戒の者のみに充満

のであ
ります。
たとえ
ば、か
の浄土
門の如
きは、
ただ衆
生の機
根とい
う視点
だけで、
一代聖
教を聖

せん。而も濁世と申してみだれたる世なり」(全集一四九五頁)
拜読の箇所は、仏教の歴史観について説明されているところで
す。仏教には人類の本質的な傾向性や社会の動向を大づかみにし
て正法・像法・末法の三時に立て分けます。この仏教史観から見
ていきますと、釈尊滅後、時代が下る末法は、劫濁・見濁・煩惱
濁・衆生濁・命濁といった五濁(五つの濁り)が、深まっていく
といわれています。

まず、劫濁ですが、これは四劫といひまして、この世界には
成住壞空じよじゆくうくうというサイクルがあるということです。一個の惑星にも、
さらには銀河系や星団にも、誕生から青年期、成長期を経て老年
期に入り、やがて滅んで空に帰するという法則があり、その繰り返
返しの上に世界はあるわけです。一人の人間の一生にも、またミ
クロ的には一個の細胞でもこうした生々流転の姿はあてはまりま
すが、ここでは一つの世界の時代相を觀想し、この世界をマクロ
の眼で捉えた見方であります。その中で「住劫第九の滅」と仏教
ではいいますが、この時は地球的な規模でいえば壮年期の安定し
た時代、生物の種としていえば何回かの消長がありますが、やや
衰退期に当たるといふのであります。

このことは最近の生物学者などの学説にもよく符合します。そ
れは、人類が種として誕生して五十万年になるといわれますが、
その間進化の過程を経て、いまは生物の種としてもピークを過ぎ
てゆるやかに衰退期に向かっているのではないかといいものです。
また動物としてはその運動能力に較べると大型化しすぎて、限界
を超えているため自分の力だけでは生きていけないような弱い種
だともいわれております。

たとえば我われの肉体でも一つの細胞が分裂を繰り返しながら死滅するものと誕生するものとが数十回連続して老化を迎えるのでありますが、その細胞の記憶装置である遺伝子自体が老化するのだといわれております。人類も、同じように数え切れないほどの世代交代を繰り返すうちに、種として遺伝子は既に衰退期に入っているのではないかというのです。

このような説を聞くと確かに人類全体として見ると、劫濁という大きなゆったりした時代の流れの中に、次第に生命力が下降線をたどっているとも思われるのであります。

次の見濁は、思想・宗教や、ものの考え方が濁ってくるということです。

煩惱濁とは、貪瞋痴の三つであります。

さらに衆生濁や命濁とは、社会や衆生の生命が濁ってきて、自分自身のことからなくなっていくということです。

そういわれて見ると、世の中が便利で発展しているように見えていても、角度を変えて見れば環境破壊は極めて深刻な状況ですし、一人一人の人間性も矮小化して、自分のこと、目先のことしか考えない人間ばかりになってきたことがなんとなく分かります。

昔の人の伝記を読んでいますと、武人や官僚また実業家など非常に質の高い徳を持っている人がおりました。例えば、一身をなげうって人のために国のために尽くすような人がいて、私財をなげうって国事に奔走したような俗に言う「井戸堀政治家」などたくさんおりましたが、今の時代にそんな人は一人もおられません。政治は名聞名利の手段であるという考えしかないのですから、政治や官僚への不信等も行きつくところまでできているようです。

《末法無戒》

この末法の時は、また「持戒もなし破戒もなし」(同)とあるように、持戒の人も破戒の人も一人もおりません。戒律を持つことと自体が時を無視したことであり、できもしないことを言うのは大聖人様が「市に虎有るが如し」と仰っているように、時に外れていることであります。



ルネッサンス期のビーナス像

が薄れてきました。むしろ自分たちが神であると思いがり、人間こそこの地球上の支配者であるという考え方に一八〇度変わってきたのです。中世以前は万物を造った天地創造

の主がいて、それによって我われが造られたという信仰だったのですが、それがひっくり返って、自分たちが世界を支配しており、神や仏の存在は人間が頭の中で作り出した産物である、という正反對の考えが生まれてきたのです。そこから人間自身を賛美する風潮が生まれ出したのです。そこで、ルネッサンスの時代には人間の肉体をそのまま美として捉え、十六世紀には盛んにヌードの絵画や彫刻が盛んに造られました。

しかし、人間を賛美することは、そのまま人間の持っている

ろんな欲望を全面的に肯定することですから、それらは一つ間違えば、欲望に対する抑制が利かなくなることを意味しますから、まさしく無戒の時代、自分の心にブレーキがない時代ということであり、まさに御書にある「無戒の者のみ国に充滿せん」(同)という状況であります。

それに対して、昔は清世しよせいといいましたように、人間というものは不完全に造られたものであり相対的なものであるから、いつでも神仏に対して畏れを知って、おごって脱線しないように、自らどこかで一定の戒律をはめていたように思います。例えば、よくアイヌの人たちが引き合いに出されますが、アイヌの人たちは川で鮭を獲っても自分たちの食べる分を獲ると、後は獲りません。一部を神に捧げて必要な分だけで満足するのです。しかし資本主義経済で育った今の人間は全部根こそぎ獲ってしまいます。山菜なども同じことでしょう。

このように、人間が全体としても個々としても自己中心的な傾向が強くなってきた結果、この身が大自然に生かされているという事実、あるいは、自分がこの世に生まれてきた意義などに無頓着になっているのです。

《見濁——価値観の混乱》

「見濁と申すは正・像やうやうすぎぬれば、わづかの邪法の一つをつたへて無量の正法をやぶり」(同)

何といたしても末法において顕著に現れますのは、ものの見方・思想的な混乱であり、人生観・価値観の混乱が非常に強くなってくるといわれています。

御書を読んでおりますと、正法というのは「法華を識る者は世法を得べきか」(全集二五四頁)と、妙法蓮華経をよくよく尋ねていけば、世法の全体であるとあるように、本来正法というのは無量にあるのですが、無量にある正法を破ってただ一つの理法に執着するのは非常に邪見になるのです。

たとえば日蓮門下においても、不受不施思想や国立戒壇等は根本義ではなく、化儀といって現実世界に展開した第二義的な教義の細目ですが、これに固執することによって一つの宗派ができるのであります。原理主義(ファンダメンタリズム)とか教条主義といわれますが、理想と現実の間に起こる混乱と執着が、いつでも仏法を滅ぼす作用をするのだと思います。

そのために、折角信仰心を起こして仏法を尋ねても、「世間の罪にて悪道におつるものよりも、仏法を以て悪道に墮つるもの多しとみへはんべり」(同)

と仰せのごとく、もちろん宗教心がないために悪道に落ちていく人も多いのですが、それよりも宗教によって悪道に落ちていく方が多いというのです。

そして、さらに悪いことに、

「善は但善と思ふほどに、小善に付て大悪の起る事をしらず」とあるように、自分たちは正しいことや良いことをやっているという独善性のゆえに、慈悲を見失い、そのことが原因でもっと大きな大悪が起ることを知らないと言われています。

大聖人の御書においても、例えば天台宗にありながら、伝教大師や慈覚大師の遺跡がすっかり荒れ果てて誰も見る人がおらず、たまにある堂も念仏堂ではないからと、わざわざその横に念仏堂

を造り、そこに大勢の檀那を集めて、盛んに念仏をやっていたといいますが、名乗りだけは天台法華宗でも、まったく換骨奪胎されてしまって、宗旨を守っていないと言われています。今の宗教団体を見ても、実際のところは宗祖とか教祖を祭り上げて、自分たちの栄耀栄華のために利用しているのが実状だと思っております。宗祖の精神・教えとは甚だ遠いのであります。

私の経験でいいますと、千葉県小湊の寺院に住職していた頃で、ちようど創価学会が一千万人も広宣流布したとか、正本堂を造ったとか騒いでいる頃でしたが、日蓮大聖人の信仰者、日蓮正宗信徒であるはずの学会員には、大聖人がお生まれになった房総の聖跡を訪ねてくる人がほとんどいないのです。

少なくとも御書を読んで、大聖人のお生まれになったところや大聖人が小松原の法難に遭われたところ、あるいは立宗宣言されたところぐらひは、日蓮正宗を信仰していれば知っているといるのですが、そういう人たちが大聖人を恋慕して訪ねてくるということがないのです。学会の新聞・雑誌に書いてあることと信仰の实体が全然違い、学会員の心のどこにも大聖人が棲んでいないことを実感したのです。今になってみれば学会という集団は池田大作の虚像を信じ創価学会という組織を信ずる教団だということは、正信覚醒運動の中ではっきりしたわけで、彼らにとって大聖人は飾りに過ぎなかったから当然のことでした。彼らの心に棲んでいたのは池田大作だったのですから…。

宗門や顕正会にも似たような信仰構造が見られるのでありまして、阿部師や浅井氏が絶対化され、いつの間にか大聖人の座に彼らがすり替わってしまうのであります。所詮末法愚悪の凡夫であ

る彼らの振るまいが、信徒にはいつの間にか仏の振るまいとして洗脳されていくのであります。

同じお題目を唱え、広宣流布するといっても「善なれども大善をやぶる小善は悪道に墮つるなるべし」で、根本の大聖人の教えを踏み外すならば、いくらお題目を唱えてもそれは悪道に墮ちる法であります。

《信仰を持つということ》

信仰というものは、信心し始めの頃は皆な「困った時の神頼み」かもしれませんが、それよりさらに一步進んだならば、自分が生きていく上で必要欠くべからざるものとなることは間違いないありません。信心は人生の羅針盤となり、自分が懐く人生の目的や理想に示唆を与えてくれるものであると思います。

宗教は必要でない人にはまったく必要がなく、気が付いた人にはこれほど必要なものはありません。動物や小さい子供には宗教心はありませんし、平均して若い人たちは宗教に関心が薄いようですが、宗教とは、早い話が一体自分はどこから来てどこへ行くのだろうかということなのです。仏法では如来、如去といい、またその去来は「明暗来去同時」^{めいあんらいこどうじ}などといいます。水がどこから来て、どこかへ流れて行ってしまふ。それが何万何千年前からずっと続いているのです。自分たちも悠久の昔からずっとどこから来て、今に生きて、やがてどこかへ去って行かざるを得ない。この本質的なところをずっと突き詰めていくと、みんな宗教になるのです。ただそこまで意識が進まない人は、目の前の今日を、何を食べようかとか、きょうは面白くないことがあったといつて腹を立てた

り、泣いたり笑ったりを繰り返して、動物的な生存本能に振り回された生き方しかできないのです。自分はこれでよいのだろうか、何のために生きるべきだろうか、こんな生き方で人生に悔いが残らないだろうかと少しでも反省するならば、動物から人間に、人間からさらに仏教的な人格に入る契機となるものと思います。

仏法では流転と還滅の立て分けということをいいますが、流転とはただ目先のことで泣いたり笑ったりして流されていくことであり、還滅とは結果から逆に原因を探っていくという逆の立場です。ちょうど大聖人様が臨終の時から自分の人生を捉えていけと言われたのと同じことで、まず最初に死があつてそれから今生きることが捉えていけなければ、今をどのように生きていけばよいか、今が分かってきます。さらには、この仏法を信することによって今生きていくことがいかにかけがえのない貴重な一瞬であるかが命の底で宗教的直感として分かってきます。それが「有難い」という心情、報恩謝徳という念慮となつて、生きる原動力になるのであります。

そして、そこにまったく違ったものの捉え方が生まれて、目先の損得や感情や欲望で生きるのではなく、もっと大きな目で人生を捉えることができると思ふのです。

《永遠の中の今に自己立てる》

この場合、一切のとらわれない知見というものは仏智であり、自我という執著にとらわれないからこそ廣大無辺の知見が生まれてくるのだと思ふます。

例えば、サッカーなどの競技もそうですが、ボールやゴールば



全体を視野に入れることが求められるサッカー

かり見てもサッカーにはならないのであつて、何時でも全体を視野に入れて空間的にも時間的にも絶えず広くチェックしながらプレーするのが名選手の要件なのです。

たしかに目の前の現実を忘れてしまつては単なる観念論に

なつてしまひますが、それを踏まえた上で大きな信仰の中から、妙法という全体のなかの自己、永遠の中の今というところに自己を立てていくのが、大聖人の信仰であると思ひます。

勿論、このような観念は自分が意識してできることではなく、一心に南妙法蓮華経とお題目を受持していつてこそ、自然にその功徳をいただくことができます。

信ずるといふことは法を信ずるといふことであり、法を信ずるといふことは、とにかく正直にこの仏法を受持すれば必ず成仏が叶ふことを堅く信ずることです。そのうえで、自身の未来成仏が決定していることが信じられれば、後は何の不足があるでしょうか。残りの一生はすべて仏子として功徳善根を植えて、菩提の種を播く人生と腹を据えれば、自ずと仏道を歩むことができるのではないと思ひます。 南無妙法蓮華経 (了)

大学入試センター試験も受験し、いよいよ目指すは京大突破と意気込んでいた一人の受験生に、思いもよらぬ試験が待ち受けていた。四日後には十八才の誕生日を迎える平成五年一月二十一日の診察結果がそれだ。病名は脳幹部グリオーマ。脳腫瘍の一種と診断された。しかも悪性のもので、治療によってある程度の延命効果はあっても、死に至ることが多いと、彼の父親には告げられていた。

両親と病院を尋ねたのは、半年前ぐらいから食欲が落ち、また物が二重に見えたりして、体調に変化が生じていたからであるが、二週間前別の病院では受験勉強のための疲れ眼が原因と診断されていたのだ。

癌の告知に踏み切った両親と一人の妹。この家族の愛と絆に支えられながら、入院生活と自宅療法を続けたが、十一月後にはその短い人生を終える。その死を迎えるまで書き続けた日記をまとめたのが本書である。

闘病記を本にしようと思いついたのは、父である。息子の死後をはじめて手にした日記には「……長くは生きられないかもしれないが、今を精一杯生きることにはできる。俺の人生の最後になるかもしれないものを、みんな、しかと見てほしい」と綴られていた。

病氣と闘いながらも短い人生を精一杯明るく生き抜いたその姿を、多くの方々に読んでもら

読書案内

松田 銘道



西田英史 著

『ではまた明日』

草思社
一二六二円

おう、それが厳しい闘病の日々を過ごさせた親としての努めだと思つたのだという。

息子の病氣を、またその死を正面から見つめ続けた親の慈愛と、そしてともに苦しみを分かち合つたそのやさしさが、本書を世に送り出したのだ。最初は自費出版の形で小さな産声をあげた。出来上がった千三百冊から少しづつ同級生や友人等に送り届けた。たちまち反響があつた。みんなが知人達へと積極的にすすめて、残りの千部がアツという間に人の手に渡つてしまふ。反響はその後、出版からテレビドラマ化へと発展。平成九年九月二十九日から十一月二十八日まで全国放映された。

映像や本書から伝わってくる、今日一日を明るく生き抜く少年の前向きな姿勢に、心打たれともかく涙を誘うのだ。

彼が明るく生きた背景には、たとえば散歩をしていて左足の麻痺が進んでいたと認識した七月二十一日には、風呂場で一人で涙しているが、確実に自分に襲いかかっている死への恐怖を一人で涙し、そして一人で立ち上がっていくという、本当のつらさをしっかりと見つめて、そこから明日に向つて明るく生きる力を身につけていたのだ。絶筆となつた十一月二十六日の日記も「ではまた明日も明るく!!」と記されている。

死を目前にしてのこの明るさを、私も身につけたい。

(正覚院主管)

続・日興上人御本尊調査記録〔八〕

山上弘道

〔平成九年十月二十六日〕

福島 渡利 仏眼寺

立子山 一円寺調査

仏眼寺は二年前に一度調査に來ている。その時は事前に訪問する旨をお伝えしていなかったこともあつて門前払いであつた。その時御虫干しはいつやるのかお尋ねしたところ、毎年十月のお会式の時にするとのことであつた。その年は丁度当方のお会式と重なつてしまい行くことができなかつた。去年は仏眼寺の本堂修葺完成法要を兼ねるので御虫干しはしないとのことであつた。そして今年二年越しの念願が終に実つて拝見させていただけることになつた。しかし写真の方はまだ切り出す状態ではない。

九月二十六日朝五時、朝霞を出発。今回は西軍や関東軍もお会式で忙しく、朝

霞の私と泰雄師・法暉師三人の調査となつた。仏眼寺へは午後一時に行くことになつてゐるのだが、法暉師が今編集に携わつてゐる継命新聞から発行される『日目上人』に掲載する、栃木県の小野寺付近の風景や信行寺の写真を撮るために早めに出発することになつたのである。東北自動車道栃木インターで降り、先ずは平井の信行寺へ。それから二十分ほど車を走らせて新田家の故郷といふべき小野寺で風景写真を撮つた。変哲もない田園風景だが、日目上人・日盛師の活躍された地であると思うと、懐かしいような不思議な感じがする。

再び栃木インターから東北自動車道のり、郡山の手前の安積サーピスエリアでランチ。時間があるのでここで一時間ほど休憩の後、一路仏眼寺に向つた。

仏眼寺は福島飯坂インターから二十分ほどのところにある。仏眼寺に着くとお会式法要ももう終わりに近く、檀家の方々が庫裡で食事をされてゐた。玄關にて來意を告げると、住職が出てこられて本堂に案内された。本堂の内陣にはお目当ての日興上人御本尊他、同寺の重宝が奉掲されていた。住職に許可を得、マスクをつけて内陣に入る。正面左に奉掲されてゐる日興上人御本尊を拝す。虫眼鏡や懐中電灯は使えないが脇書は幸いにも間近に拝せる。

一、日興上人御本尊 乾元二年三月一日
（寸法不明）三枚継

脇書一（左）駿河國富士上方上野郷十郎入道明蓮授与之。（右、異筆）

日興上人御筆僧日授与之日
花押

『基礎的研究』では「上野郷」を「上野国」とし、「蓮授与之」が読まれていなかったが実見によりこのように確認した。当日は拝見できなかったが、当寺発行の『仏眼寺沿革誌』によれば当御本尊には「仙台仏眼寺二十四世隠士東嶺院勸主日玄、延享三丙寅十二月四日」との裏書きがあるようである。次項に紹介する当寺所蔵の大石寺五世日行上人の御本尊にも日玄師の裏書きがあり、それによればこの両御本尊は延享三年に日玄師により仙台仏眼寺から渡利仏眼寺に奉納されたものらしい。また、御本尊右方に記された異筆については、若干見づらかったが「日任花押」と記されており、当寺の歴代（ほか）の他当寺有縁の要法寺歴代、仙台仏眼寺歴代、大石寺歴代を見るに大石寺四世日任上人以外にその名は見あたらな

い。本源寺所蔵の大石寺四十八世日量上人の書状には渡利仏眼寺の名が見られるので、当時は通用があり、そうした中で記されたものであろうか。しかし、これにしては「授与之」の記載は他寺院の重宝故に穏当でない。この件に関しては今後の研究を期すほかない。

尚、寸法は測ることができなかったの

で他日を期したいと思う。また、当御本尊の写真は『仏眼寺沿革誌』に掲載されている。

御本尊を拝見し終り住職に御礼を述べた。住職は御覧の通りで大変忙しくお相手もできないがお茶でも飲んでいって下



福島市渡利 仏眼寺の山門

『日興上人御本尊集』を出版した直後興風談所で記念勉強会を行い、その時御本尊調査の模様と今後の課題について話しをした。そして課題の一つに要法寺の調査をあげた。発表の後妙観院山崎潤道師から、桐生君が今要法寺の僧籍にあることを教えてもらい早速連絡をとったのである。そんなことでお茶を戴きながら話も弾んだ。師は私たちの、各門流の主義主張は異なっても日興上人の基礎的資料の整備等、門流を越えてすべき仕事は協力しあつて行くべきとの意見に賛同の意を表してくれた。桐生師とは再会を約し住職にご挨拶を申し上げて仏眼寺を辞し、霧のような小雨の降る中、次なる目的地立子山の一円寺に向った。

立子山へは国道四号線から国道一一四号線を阿武隈川沿いに上つていく。途中前方に大きな虹が川と道路をまたぐようにくつきりと見えた。鮮やかな虹は車がくぐり抜けようという手前で当然のことながら忽然と消えた。あれは明日に架かるべき橋だったのか、それとも幻を暗示するのかなどと思つている内に一円寺に着いた。一円寺さんは所用で仏眼寺のお

会式には出られなかったそうである。当寺に格護されている日興上人御本尊を是非拝見させていただきたいのだが、なかなかガードが堅い。もう何年も御虫払いをしていないらしい。重宝が心配だから是非にと申し上げたが色好い返事ではなかった。因みにその折拝見させていただいた重宝目録から、主なものを左に掲げておこう。

一、日蓮大聖人御本尊

弘安三年正月八日

縦一尺七寸五分・横七寸九分

脇書「沙門日入」

一、日興上人御本尊

嘉元二年十月十三日

縦一尺九寸五分・横一尺一寸五分

脇書「奥州登米郡加賀野三郎次郎」

（菅野慈俊師『建武元年新田孫五郎国宣執達状をめぐる奥法華衆の考察』仙台郷土研究第二十三巻二号十九頁には、「奥州三迫加賀野三郎次郎授与之」とある）

一、日蓮大聖人御真筆

①方便品九十文字

②譬喻品百二文字

その他、大石寺十七世日精上人御本尊、大石寺五十六世日應上人御本尊などがある。

どうも先ほどの虹は幻を暗示していたらしい。しかし、程近い（といっても二十キロほどはあろう）霊山町にある蓮昌寺に日興上人御本尊があるという情報を得た。一円寺住職が古い目録らしきものを見せてくれたのである。霊山町といえれば日尊師の出生地説のある玉野のある所である。今日は連絡も取っていないし遅くなるのでいざれ必ず調査したいと思う。

ところで今日一円寺さんにお邪魔した第一の目的は、先日一円寺さんから池田師が、一円寺さんの総代で要法寺三十一世日舒師の生家といわれる加藤家に、日興上人御本尊が所蔵されているという情報を得、加藤氏を紹介していただくことにあつた。そのことを切り出すと今日は仏眼寺に行っていたはずだ、会わなかったかという。当方は一面識もないからわかるはずもない。お会いしておりませんと申し上げると、まだ帰ってないかもしれないぞといっているところに電話がかかってきた。どうも話しぶりから加藤氏

らしい。あまり良い感触でない。電話が終り住職も冴えない様子である。今帰って来たらしいが会えないかもしれないぞという。当方はどうせダメモト、ここまですで来ているのだからお寄りしないで帰るわけにはいかない。道順をお聞きしてわれわれは加藤家に向つた。加藤家は国道一一四号線を戻り、二つ目の信号を右に曲がつてすぐ、左方三軒並んでいる旧家の三軒目の家である。チャイムを押し、出てこられた奥さんとおぼしき初老の婦人に来意を告げると不在であるという。変だなと思つたが先方がそのようにいうのだから仕方がない。せめて日興上人特集の『興風』十一号を贈呈させていただこうと思つたが、それも受け入れてはもらえなかった。とりつく島がない。残念だがまたの機会を待つとしよう。福島にはまだまだ活字に表れていない日興上人御本尊を初めとする重宝があるような気がする。ねばり強い調査が必要である。われわれは一分の成果と多くの課題を抱えて帰路に着いた。行楽のしかも日曜日とあつて東北自動車道は混んでいた。朝霞に着いたのは十時過ぎであつた。

一月十七日は阪神淡路大震災から、三年が経過し各新聞には、被災地から現在のメッセーじなどが特集された。それはどれも腹の底からの呻吟で、ズシリと重く感じた。

なかに「だれも少しづつ温かかった」とあるのは、倒壊した高速道路のすぐ側に住み、自身も被災した、もと阪神タイガースの監督、村山実の声。この言葉が被災直後に体験した、人のぬくもりを喜び懐かしむ声か、はたまた

天地つかの間

〔その二十八〕

成田 詳道

人間の平時の不人情を、悲しみ失業する声なのか、真意のほどは解らない。

話変わって、読書の楽しみとか、喜びは各人各様で、こうでなければいけない、というきまりのないのが嬉しい。もっとも、自分が感じ入った本を、人に進呈した後で「この本のどこがいいんじゃない？」といった、困惑顔に遭遇し、恥ずかしくなることがある。

そこでこの際、私はこんな下心で、本を読む、という手の内の一端をバラしておく。本

を読み進むにつれて、作者の主張が、次第に高くなり、読み手の波調が、そこに近づいたとき、作者はどのような文句で、読者にとどめを刺すか。これがカスリ傷に終るか致命傷となるかで、私の読後感はおおいに左右される。

大衆小説家を自認した、山本周五郎は「自分に悲運がまわってきて、初めて他人の苦し



山本周五郎

みがわかる、というのはたまらないことだ」(「雨の山吹」と言った。人間の本性を浮き彫りにし、奉安したような文句なので、ノートに書き留めてある。

周五郎は「政治にも道德、法律からもかまわって貰えない、最も数の多い人たちが、一番頼りになるのは、お互い同士のまごころ、愛情、そういうもので支えあって行く……これが最低ギリギリの庶民全体がもっている財

産」と信じて、書き続けた作家だから、なおさらこの文句が、卜胸を衝く。

話もどって、神戸や西宮にくらべ、被害の軽かったせいも、近ごろ、自分のなかから「震災」がうすれかけている。しばらくは身辺の揺れに、神経質なまてになった身体が、人の携帯電話の呼び出し音でも聞くように、鈍くなっている。そして、他人の苦難に対しても、あの直後のような意識や行動とならず、平穏な日に墮落している自分に驚く。

法華経には「願わくは此の功德をもって普く一切に及ぼし我らと衆生と皆ともに仏道を成ぜん」とある。自分だけの世界なら、誰でももてる。しかし人と共有し、共に生きる世界をもつことは、難しい。

いや、それどころか「願わくは、此の功德は我が身一身に集中し、〇〇だけには及ばないように……」などと考えてはいないか。そして気がつけば、高いところに磔にされ、目の前には左右に交差された二本の槍が、チャリンと音をたてて……うわあーゴメンナサイと、寝汗をかいてしまおうのである。

だから前のような新聞特集を、私は時間をかけて読み「情けは他人のためにはあらず」と、せつせと自分に言い聞かせたりする。

(源立寺執事)

「たかがわずかな壁一重
我が家と外界を隔てたり」

江戸風流談の一節ですが、その通りで、家の強度と家の内外を完全に分けるのが壁の存在です。

現在四十代・五十代以上の方々が幼児期を過ごされた家々の壁は、大抵土壁であつ



たろうと思います。柱と柱の間に割竹を編み（こまい、という）、それを芯に赤土とワラを練り合わせた材料を両面から塗り付けた土壁の上に、石灰漆喰で仕上げた、いわゆる土壁が何百年もの伝統でした。

しかし、戦後三十年頃よりモルタル壁が主流になっています。バラ板木地に砂とセメントを練った（モルタル、という）材料

を予め張られた防水紙と金網（ラス）の上からこてで二・三回に重ねて塗り、仕上げていきます。

一見堅牢そうに思われるのですが、施工条件や寒暖等の条件により亀裂（クラック）が出来やすく、また木部や金属部には付き難く、はがれやすいのが難点です。これはモルタルの性質が、一度固まると膨張と収縮の比率が違い、収縮率の方が高いために亀裂が生じ易いのです。

外壁の場合、少し離れて見て、頭の毛のように見える細い割れは放置しておいても差し支えありませんが、鉛筆が入る程の割れは出来るだけ早く修理の必要があります。雨の入り水の原因となり、ラス（金網）の腐りから木地より外れ、少しの衝撃でも脱落することになります。しかし、それより尚始末の悪いのは、その割れを放置したままにして、木地迄腐らせてしまうことです。土台桁（基礎の上部の横木）が腐り始めると壁の脱落どころではない被害が生じます。では、その補修と修理について述べましょう。

先ず、こまめに点検することから始めて下さい。亀裂があれば割れ口の段違いがないかを調べます。無ければ市販のコーキン

グ材を注入します。これはポンプを用いると便利でしょう（販売店で聞くとすぐ分かります）。色は五・六種類ぐらいいります。コーキング以外であればセメンのみを糊状にねり、ヘラ等で押し込むように詰めていきます。その後、手早く水に浸したスポンジで表面を仕上げていきます。

割れ口に段違い（高い方が六・七ミリ）があれば高い方の壁を手で軽く叩いてみて下さい。そしてポコポコと浮いたような音がすると、かなり広い面積が木地から離脱しているのを見て間違いないでしょう。これは、一度専門家と相談して下さい。

前に戻りますが、点検の際、窓枠・その他取付物の周辺で、入水原因となるような所があれば、前述した手順で補修して下さい。

内壁は、外壁ほど直接雨風に晒されることとがありませんので、多少の亀裂があつてもそう慌てることはないでしょう。それより、見た目を重視して、機会があれば上壁の仕上げ直しをされることで、同時に解決すると思います。但し、浴室の壁は漏水という観点から、また別の項で述べましょう。次回は、「床」について述べたいと思います。

「弟子分帳」と十七回忌〔二十二〕

松田 銘道

チ、「立正安国論」と日向師〔2〕

波木井氏と日向師との間に生じた問題については、「原殿御返事」に詳しく述べてあります。日辰師の写本が伝わるのみで、真蹟は存在しませんが、離山に至る経緯等、興味深い内容となっておりますので、おもに日向師の「立正安国論」への見解を通して、波木井氏が謗法をかさねるようになった背景を探ってみます。

「原殿御返事」には、波木井氏の謗法行為を三つあげていますが、その第一には、「安国論の正意を破候ぬ」

（『興全』三五五頁）

と、「立正安国論」の神天上をめぐる問題が取りあげられています。

他の二つの謗法行為——一体仏の建立と謗法への布施——も、もともと「詔曲したる」日向師の「過」とされた日興上人は、

「自今已後安国論の如く聖人の御存知在世二十年の様に信じ進せ候へしと、改心の御状をあそばして御影の御宝前に進らせさせ給へと申候」（同）

と、改心の具体的な方法を示して、波木井氏を教導されようとしています。

ここには具体的な方法として、

イ、改心の御状を認めること。

ロ、御状は大聖人の御影の御宝前に捧げること。

以上のことが提示されています。

イの御状を認めるにあたっては、「自今已後安国論の如く聖人の在世二十年の様に信じ進せ候べし」と、「立正安国論」の教えを守り続けることを記述するよう求められています。

ここでの「在世二十年」とは、『日興上人全集』の頭注でも指摘しているように、

イ、波木井氏が大聖人の教えを信じてきた年月。

ロ、大聖人が安国論を撰述・上呈されたから御入滅までの年月。

このどちらとも受け止めることができませんが、どちらであっても日興上人が改心の御状に、「立正安国論」の教えを守ること求められたのは、謗法行為の発端も、さらに謗法をかさねていく背景も、すべてが「安国論の正意」を破ったことに起因していたからだと思います。

また、ロの改心の御状を御影の御宝前に捧げるとされたことは、日興上人が大聖人の弟子との立場を貫いて、申状を捧げたその信仰姿勢そのものと同じです。

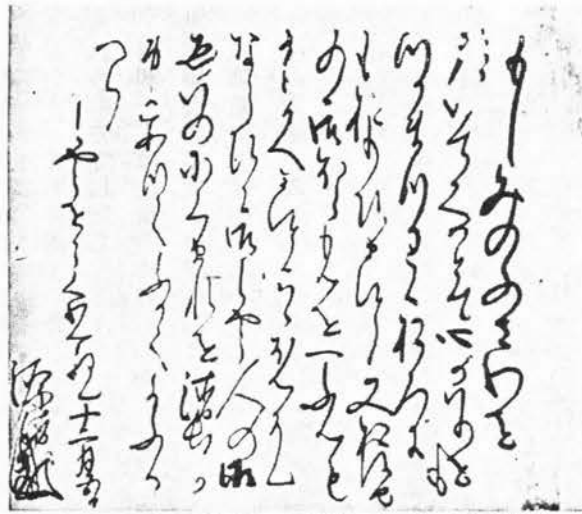
このことは、日興上人の教導に対して波木井氏が、

「我は民部阿闍梨を師匠にしたる也」（同）

と、日向師の教えに随うと背反した行動をとってきたことに対して、

「法華経の信心逆に成候」(同)

とされ、それはあたかも本師の積尊を捨てて阿弥陀仏に帰依するのと同じだと非難されていること。またそのことは、



実長の子清長が御影の御宝前に捧げた「清長誓状」

「日興か波木井の上下の御為には初発心の師」(同)

と、波木井氏との師弟の関係を示して、その師弟をも見失う行為となると、重ねて師弟の関係を指摘されていることから、い

っそう明らかになってきます。

しかして、日興上人が波木井氏に「立正安国論」の教えと、師弟子の法門を守ることを強く勧められたにもかかわらず、波木井氏が日向師の教えを重要視して背反する態度を示したことは、五人の本弟子方が天台沙門と名乗り、師弟子の立場を捨てたその誤りとまったく同じです。

また、身延で天台大師智顛の忌日に奉修する大師講において、日興上人が「此祈は当時致すべからず」と「再三」中止するよう説得されたにもかかわらず、日向師は、

「天長地久御願円満、左右大臣文武百官各願成就」(同三五三頁)

との国家安穩の祈禱を行います。

このため正応元年(一二八八)のこの年、日興上人は大師講での「問答講」を中されています。

大師講での国家安穩の祈禱は、日昭師や日朗師が法難を避けるため、申状で国家安穩の祈禱を表明したその立場と、これまた同じです。

蒙古襲来に危機感を懐いていた幕府が、敵国降伏や国家安穩を積極的に寺社に要請し、寺社が争って祈禱の成果をアピールし

ていく社会状況にあつて、国家祈禱を理由に問答講までも中止する日興上人の態度は、日向師には「争か国恩を知り給わず」(同)との、偏狭な態度としか映らなかつたようです。

さらに、日向師は安房に下向の時、わざわざ波木井氏に会い「外典の僻事なる事再三申し」(同三五六頁)ていいます。

再三語つたとの「外典の僻事」が、具体的にどのような教えなのか事例はあげてないものの、日興上人が、

「立正安国論」も、また「文永八年の申状」―「昨日御書」―も、さらには法華経そのものも「外典にてかからせ」(同)たものであると反論されていること。

口、「内外の才覚無しては国も安すんぜず、法も立て難い」(同)と、内典・外典ともに捨て去るような教えであり、そこからは国を救う教えも、また法華経の教えも生まれてこないと批判されていること。

以上のことから、日向師がかなり逸脱した教えを展開していたことが伝わってきます。

なつてあらわれてきます。日向師は、神社

参詣を禁止するとされた日興上人に対して、

「外典読み片方を讀んで至極を知らざる

者」(同三五二頁)

と非難していますが、その至極の教えとは、

「法華の持者参詣せば諸神も彼の社壇に

来会す、尤も参詣すべき」(同)

というものでした。

日興上人は法華の持者が参詣する度に諸

天が来会するとしたその教えを、

「師敵対七逆罪」(同三五三頁)

と批判され、師敵対の日向師を「不法の学

頭」として糾弾し、「擲出す可き」覚悟で

臨むとされています。この厳しい態度から

も、日興上人が神天上の問題をいかに重要

視されていたかが知れます。

神天上への日向師の考えは、大聖人が童

口法難の際、法華經の行者への迫害を守護

しないことを鶴岡八幡宮の社頭で叱咤し、

また鎌倉八幡の宝殿の焼亡が法華經守護の

誓いを果たさない罰とされたその諫曉のあ

り方をして、

「我が弟子等の内、謗法の余慶有る者の

思ていわく、此御房は八幡をかたきとす

と云云」(「諫曉八幡抄」全集五八四頁)

と、「八幡をかたきと」すると非難した、「謗

法の余慶」の弟子の姿を思い起こさせます。

また日向師は、安房に下向した時もわざわざ

わざ波木井氏に会って、「外典の僻事なる

ことを再三」語っていますが、このことか

らは、波木井氏に神社参詣を許可するなど

の教えを説くことによって、擲出されるべ

き自分の立場を波木井氏を楯に守ろうとし

た意図があつたのではないか、そんな想ひ

さえ懐かせます。

日興上人は、波木井氏に語つた「外典の

僻事」を、「邪見奇異に覚え候」と批判さ

れています。この邪見が一体仏の造立や

謗法の施の奨励となつて、波木井氏が日興

上人と義絶する原因を生み出していきます。

このように「原殿御返事」からは、日向

師の「立正安国論」の見解―主に神天上法

門の教え―によって、波木井氏の謗法行為

が発生し、身延離山の要因となつていった

ことが知れます。そしてそれは、「御伝土

代」の記述とも一致しています。

「御伝土代」や「原殿御返事」での身延

離山の原因や経緯からして、⑦の申状で

「立正安国論」を副進した可能性はかなり

低いと思われれます。

(正覚院主管)

【如月詠草】



お題(道) 道の想ひ出

〔山田 絢子〕

懐しき あの道この道 ふるさとの

道は我等を はぐくみにけり

ありがたき 国に生れて あいがたき

仏の道に あえるうれしき

〔橋本 義一〕

濃緑の葉にかこまるる ハイビスカス

夜目にもしるけき 満月のごと

数年ぶりに訪ねし戦友は 去年逝きて

孫が描きし 似顔絵笑う

〔橋本 圓子〕

数十年 秘めし懊悩 告白す

ニューギニア残存兵の 戦争無惨

極限状態の 真相謝して 弔いし

兵らの勇氣に 遺族の感涙

〔坂本 フミ子〕

焦点の合わざるシャッター押したるか

春まだ遠く 風花は舞う

注ぎたる 水は過剰と なりたるや

忽ちしなる 観葉植物

ちよつと寄り道 ⑳

インターネット

伯耆の里 もりたかんどう

いわゆるパソコン通信も、最初のころはもの珍しさが手伝って、ずいぶん夢中になった。実務面でその恩恵をこうむったことも数多い。その便利さを周囲に吹聴してまわった時期もあった。が、一通り使いこなしてみると、便利にはちがいないが、今は時折、依頼の原稿などの送受信程度になって、舞台はインターネットにとつてかわった。

そのインターネットも、パソコン通信の多少の反省から、初めは静観していた。そもそも画像でのデータのやりとりが中心だとわかった時点で、あ、これは電話代がたまらない、うちには不向きだと、すぐに感じた。それでなくとも読みきれ

ない本を抱え込んであましているのに、これ以上の情報を増やしてどうするの、という疑問はあった。第一、英語が弱いのに海外からの情報収集も何もあつたものではない。まさにインターネットのよさはわかつていても、関心が薄いゆえんである。

ところがある日、インターネットの実演を見た。それまで懐いていたイメージは一変し、抱えていた疑問は一掃した。そしてプロバイダー（インターネット接続業者）が市内に誕生するとただちに契約をし、ネットスケープというブラウザ（インターネット用ソフト）を購入してインターネットを始めた。ブームに乗せられたことは否定しないが、聞くとは大違い、その実演の効果は私に限っていえば抜群だった。

一年ほどいろいろなところのホームページを見ていううちに、ま、こんなものか

など、雰囲気がわかってなれば卒業した気分になっていたら、「紀伊国屋インターネット店」というホームページがオープンした。国内の書籍一二〇万冊の検索ができ注文もできるという便利さ。「仏教」という名のつく本を探すと二七〇件、「日蓮」は六三〇件が数秒でピックアップされた。そのリストを見るだけで興がわいてくる。遊びではなく、いよいよ本物が立ち上がってきたことに、改めてインターネットを見直した。

そういえば、近ごろはちよつとした連絡がインターネットの電子メールで来るようになった。これまでのFAXや郵便でのやりとりを電子メールに切り替えるところも増えてきている。

こうなると、少し遠ざかりかけていたインターネットだが、実務上からも時々アクセスの必要がある。遊びによし、仕事にもよし、といったところか。

（大安寺住職）

恵日だより



元朝勤行の後おとそを頂戴する参詣者

元朝勤行会

一月一日(木)

年号が平成と改まってより、午前零時の元朝勤行会に参加される方が、次第が増えております。阪急電鉄が終夜運転を始め、交通の便が良くなったこともありますが、新年の初めにまず、根本道場たる菩提寺に参詣し、法華経のご本尊にお目通りされる信心の志は誠にありがたく、諸天善神の加護するところであります。

一日の午後はあいにく、雨模様となりましたが、零時、十時、二時の勤行会ともに、新春の祝賀を寿ぐ善男善女で、本堂は埋めつくされました。

ご住職は、読経唱題の法味言上について、寅年にちなみ御書の「石虎將軍の諭」を引

かれ、正直な信心に生きることの大切さ、を説かれました(次頁掲載)。やがて、お流れ頂戴の儀に移ると、法界の邪気を払い、長寿延命の薬と言われる、お屠蘇を参詣者は緊張の面持ちで飲みました。その後は肩の荷もあり、左党は樽酒を前にトラ談義、下戸は大火鉢の茶釜を囲んで、ネコ談義とあいなりました。

成人式

一月十日(土)午後二時

この日は福田一見・光代さんの長女、福田智恵さんが新成人となられ、御宝前にて祝福を受けました。昨年は体調をくずし、健康が危ぶまれた一見氏でしたが、今年は新年早々から体調回復に拍車を駆ける、なよりの慶事となりました。

式はご住職の御導師で、尾林講頭と講員有志による読経唱題の後、日興上人の御真筆本尊頂戴の儀があり、ご住職の祝辞と記念品贈呈、青年部の栗野君から花束贈呈とすすみ、記念写真を撮影して終了しました。

正直の信心に生きる

住職 菅野憲道

にまことの道にかないなば、祈らずとも神や守らん」というものがあります。

これは、日本古

平成十年、明けましておめでとうございませう。

新年の開幕にあたり、法華経の御本尊のもとに詣でられて、それぞれの希望・心願をもってスタートを切られたことは、誠にめでたいことと存じます。

さて、報道などでは今年には神社仏閣へ詣でる人が多いのではないかといわれておりますが、その神仏に祈願を立てるといふことには二つの面があります。

すなわち祈願の対象の神仏が果たして本当に正しい神仏であるかどうかということと、もう一つはそれに対する自分たちが誠の人としての道に外れていないか、という二つの面であります。さらに仏法では感應同交と申しまして、祈る側と祈られる側の両方が一致してはじめて成就するといわれています。

日興上人が引かれた古い歌に、「心だ

来の宗教に対する観念が、常に正直ということを第一の徳としていることを日興上人が重視されたものであり、また大聖人も御書の至るところで、法華経には正直捨方便とあって真に正直のお経であり、これを信ずる人こそ一番の正直者であると仰せられています。

昨今の世情を賑わす政治・経済の問題も正直の徳を失い、信を失ったところから起こるのであります。

ところで今年寅年ですが、虎といひますと石虎將軍の話が有名であります。

これは中国の前漢の時代の勇將の物語であります。李広という幼い頃に父親を虎に殺されてしまった若者の話であります。この青年がなんとしても父の仇をと、あちこち荒野を探していたのですが、ある日の夕ぐれ、ついに一匹の虎を発見し、これこそ自分が長年探し求めていた父の

仇と、渾身の力を込めしぼって矢を射たところ、見事に命中したのです。ところが、駆け寄ってみると虎ではなく大きな岩が横たわっていて、そこに矢が突き刺さっていたのです。石に矢が立つはずはありません。しかしその時は見事に突き立ったのであります。

まことに一念というものは恐ろしいもので、不可能を可能にするほどの力を持っているということ、この故事は示しているものであり、ここから「一念岩をも通す」という諺が語り伝えられているのであります。

日寛上人もこれを引いて、我われの心には無明の煩惱という凶暴な虎が棲んでいるようなものであるが、法華経を持つ一念心は、必ずこの邪悪な煩惱魔を射止めることができると思われています。

混乱の時代といわれており、なかなか難しい時代状況になってきておりますが、それだけになおのこと、この宗旨が「正直」を旨としていることを忘れず、今年一年正直に、法華経の信心を杖とも柱ともたのみ、それぞれの人生に勝利を収めていただきたいと思います。

ちなみに福田家には、高玉師、向島師、菅野師と源立寺の三代ご住職より、それぞれ命名をいただいたお子たちが居られ、今年成人式を迎えられた智恵さんの名付け親は、先代の向島ご住職だそうです。



ご両親に囲まれて記念撮影

当時、法華講青年部だった福田さんは、大石寺登山の帰りに源立寺に詣で、無事帰山の報告を済ますと、命名書きを頂戴して帰宅したことなどを、昨日のこのように話す福田さんのように、祝福に集まった人々は皆じっと聞き入っておりました。

初お講・合同役員会

一月十一日(日)午後一時

むかしから三ヶ日が明けても、初お講が済まなければ、法華講員の新年は始まった気がしない、と言われますが、実感ではないでしょうか。講中行事としても、初参りは華やかな中に参詣し、初お講は実質的なスタートとして、対照的になります。

初お講は「諫曉八幡鈔」を引いて、ご説法がなされました。尾林講頭の挨拶と、連絡事項が済むと参詣者全員に、恒例の鏡開きのお餅で作る、ぜんざいが振る舞われました。その後、初の合同役員会が開かれ、役員全員からしばし、真剣な抱負や反省、質疑応答が行われ、ご住職の指導がありました。

また終了後にはご住職の主催で、役員慰労の新年会が開かれました。なお例年、参加者による会食の一部負担は、アジア諸国の井戸掘りボランティア団体に寄付してきましたが、今年「正信会学衆援助基金」

に送付することにいたしました。

文化財防火保護立入り検査

一月二十一日(水)

寺社仏閣は文化財でもあり、池田市消防署では、防火保護の立ち入り検査を、毎年一月の下旬に実施しております。今年も源立寺には、三名の消防署員が、午前中に検査にみえました。

ご住職の立ち会いのうえ、建物の火もと安全点検、消化器の設置状況、使用期限の合否などを、点検検査したうえで、火元管理者の責任全般について、などが確認されました。検査は問題なし、合格となりました。検査は問題なし、合格となっておりますので、みなさまには、ご安心を願います。

なお、講中檀信徒のみなさまにも、ご参詣のおりには消化器の設置場所や、使用方法などを確認されることも、大切かと思われまます。くれぐれも火災には気をつけましょう。

役員研修会

一月二十五日(水)

もっとも寒さの厳しい、寒中の時期に、初始動たる役員研修会が開かれました。午前十時より読経唱題について、山本副講頭の司会で尾林講頭の挨拶、宅お講について(執事)、源立寺法華講の信心(住職)と指導がなされ、午前の部は終了しました。昼食の後、橋本副講頭から、役員的心得と宅お講についての提言があり、引き続き、来る合同地区総会の打ち合わせがなされ、住職・講頭の挨拶をもって、午後三時過ぎに、一切が終了しました。

役員会 ニュース

- 一、全役員が順番に、真剣な反省や、力強い抱負を発言しました。
- 二、二十五日の役員研修会で、合同地区総会の内容を検討する。
- 三、地区役員の負担が、特に大きい地区

は、講頭・幹事が助力する。

- 四、役員としての責務と善意が、地区員にうまく伝わらない。
- 五、地区員の家を積極的に訪問し、垣根を低くしたい。
- 六、宅お講に新来者を誘うようにしたい。
- 七、宅お講の活性化は、まず自身の活性化の上に。
- 八、その他。

これらの発言に対してご住職より、講中のことでまた、役員の仕事に関して、各自が真剣に悩むことは、それ自体が積功果徳(功を積み徳を重ねる)の姿である。一般的には自分の信仰や、家庭のことを考えて行動するが、信心のことで地区員や、法華講全体のことまで心配する姿は尊いことである。ただし、一人で悩み込んだり、思い詰めたりせず、お寺や幹事に相談をして欲しい。時には気分転換に休養をとることも大切で、要は「今の時法華経を信ずる人

新規造成しました 五月山霊園 (池田市広報より転載。)

申し込み資格 = 3年以内に墓碑を建てることのできる、市民または本市に本籍のある方
 申し込み用紙配布 = 1月16日(金)から土木総務課、または市役所1階なんでも相談コーナー ☎ 2月2日(月)~6日(金)に、市役所6階第3会議室 ☎ 同課 ☎ 54・6270

区分	間口×奥行 (m)	区画数	永代使用料	管理料		
				5年前納	20年前納	
新規造成分	2m型	1.10×1.82	137	42万円	18,000円	72,000円
	3m型	1.70×1.82	311	64万円	27,000円	108,000円
	6m型	2.20×2.73	124	128万円	54,000円	216,000円
	8m型	2.20×3.64	8	196万円	72,000円	288,000円
返還分	3m型	1.70×1.82	5	64万円	27,000円	108,000円
	4m型	1.50×2.73	1	83万円	36,000円	144,000円

※遺骨のある方を優先。管理料は5年前納または20年前納のいずれかを選択。市外の方は永代使用料5割増し。

あり、或るは火のごとく信ずる人もあり、或るは水のごとく信ずる人もあり……水のごとくと申すはいつも退せず信ずるなり」(「上野殿御返事」全集一五四頁)の御金言のごとく、不断に持続できる、無理や気負いのない活動を目指すように(要旨)との指導がありました。

二月の行事

- 一日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会
午後二時 お経日
- 三日(火) 午後七時 節分会
- 七日(土) 午後二時 広基寺お講
午後七時 興師会
- 八日(日) 午前十時 子供会・お餅つき
午後一時 お講・御誕生会
- 十三日(金) 午後一時 お講
- 十五日(日) 午後一時 合同地区総会
(旭丘・緑丘・服部)
- 二十一日(土) 午後二時 教学研究鑽会
- 二十二日(日) 午後一時 合同地区総会
(槻木・宝塚・神戸)

※二月一日の継命新聞の発送は
『庄内・大阪』が担当地区です

三月の合同地区総会

- 十五日(日) 午後一時 庄内・川西・蛍池地区
- 二十九日(日) 午後一時 大阪・高槻・箕面地区

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします。
締め切りは、毎月二十日です。



恵日

平成十年二月号 通巻三十六号
平成十年二月一日発行

編集兼
発行人

菅野 憲道
恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内
TEL (0727) 511335
E-Mail: genn@wombal.or.jp
BBS: PXH05170 (NIFTY) BMC92733 (PCVAN)